

# 出会いの場面にみられるあいさつ語と実質的表現

長谷川 頼子

キーワード：あいさつ語、実質的表現、省略、定型化、合図符帳性

## 1. 本稿の目的

人と人が出会い、コミュニケーションを開始する場合には、問投詞や呼称による呼びかけの表現(「おー、としえ」「あー!」など)、「おはよう」「こんにちは」のようなあいさつ言葉や、より実質的な表現(「お久しぶりです」「元気ですか」など)が類別される。このうち、あいさつ語に関しては、あいさつ行動の主要部を担うとして、数多い記述が成されているが、より実質的な表現まで含めて、人が出会いの場面でどのような言語行動をとるかという問題となると、対象となる発話表現の種類が質量とも飛躍的に増大することや、研究によっては対象範囲の違いもあり、十分な説明が得られていないのが現状である。

そこで、本稿では、上記の「おはよう」「こんにちは」などのあいさつ言葉を「あいさつ語」、また「お久しぶりです」や「元気ですか」などの表現を「実質的表現」と呼び、両者について、大学生を対象とした言語行動の調査データ<sup>1</sup>に依拠しつつ、関係を整理するための考察を行う。従来の考察では、あいさつ語と実質的表現は、前者が決まり言葉であり、後者がより実質的な意味内容をもつ、というような表面的な相違の把握にとどまるのに対し、本稿では、一発話の構造に着目するもの(2章)と、話し手・聞き手の発話連鎖に着目するもの(3章)とに分けて考察を行う。まず、出会いの場面における発話形式を概観すべく、発話を形成する各成分を類別し、発話構造の成立には一定の語順的制約があることを示す(2.1)。そして、両者の関係について、先行研究等の検討もふまえつつ、機能・形式的特徴を比較しながら考察する(2.2)。また、機能的特徴に関連して、あいさつ語が省略された発話を取りあげ、実質的表現があいさつ語に代替する機能をもつという解釈を提示する(2.3)。さらに、発話連鎖の観点からは、コミュニケーションにおける合図符帳性(おうむ返

<sup>1</sup> データとして、1997年7月に都内の大学生を対象に行った、以下2種の調査結果を用いる。

- (a) 観察記録(出会いの場面における発話のやりとりの記録136例)。記録は、時刻・人数・性別・待ち合わせの有無・発話形式(話し手・聞き手による発話連鎖(相当分)・非言語行動)の6項目からなる。
- (b) 質問紙調査(130部配布、有効回答数101(男子51・女子50))。時間・場所・相手・状況(待ち合わせの有無)の各要素を含む出会いの場面を1設問として、操作的に30の場面を設問化した質問紙を用い、記入は、言語行動・非言語行動を自由回答とした。各設問内容については、土屋(1998)を参照。

(例)朝、いつも待ち合わせている授業の場所で、親しい友人と会いました。

(朝) (待ち合わせ) (公的場所) (親しい相手)

し)という性質に着目した分析を行い、あいさつ語と実質的表現の各特徴を検討する。

## 2. あいさつ語と実質的表現の諸相

### 2.1 発話形式の構造—発話を形成する成分と配置上の制約

ここでは、一発話(主として話し手による)を単位とした考察を行う。

まず、出会いの場面に見られる発話形式は、基本的に次の成分から形成される。

- (1) 間投詞 (あら、おや、あー、おー、など)
- (2) 呼称 (〇〇さん、〇〇ちゃん、先生、先輩、など)
- (3) あいさつ語<sup>2</sup> (おはよう(ございます)、こんにちは、こんばんは、など)
- (4) 実質的表現 ((1)~(3)に属さない表現: お久しぶり、お元気ですか、おまたせ、何してるの、元気?、いた!、暑いね、行こうか、など)

通常、呼びかけや詠嘆のような発話では、「やあ、こんにちは」「もしもし、山田さん」のように、未分化な情報が分化的情報に先行して配置されるという発話構造上の制約が働く(甲斐(1985)、宮地(1984))。そこで、上記のカテゴリに従って出会いの場面にみられる発話形式を分析した結果、発話が構成される際、厳密には間投詞から順に、呼称→あいさつ語→実質的表現と、成分同士が順序性を成していること、そして発話は任意の成分の選択<sup>3</sup>によって形成できるが、順序性は覆せないことを加えて指摘した(長谷川(2000b))。つまり、あいさつ語と実質的表現では、発話を形成する際に、必ずあいさつ語が先行するという関係にある。

そこで、さらに詳しくみた結果、(4)の実質的表現に含まれる形式が複数用いられる発話では、いくつかの形式が、その他の形式に先行して配置される傾向が認められた。これは「あー、久しぶり、元気?」のような場合である。例えば、「お久しぶりですね、これから授業ですか?」という発話は自然であるが、「これから授業ですか?お久しぶりですね」のように「お久しぶりですね」を後置すると不自然に感じられる。これを、「お久しぶりですね、おはようございます」のように、あいさつ語に先行して配置すると、会話の切り出しとして不自然となる。つまり「お久しぶりです」という形式は、あいさつ語には後置するが、実質的表現の一部の形式との間ではさらに順序性を形成すると考えられるのである。この「お久しぶりです」と同類のものには、「お疲れさまです」「お待ちせしました」「ご無沙汰してます」といった形式があるが、いずれも特定の文脈がなければ用いられないので、実質的表現と区別し一つの成分カテゴリとして独立させるのには無理がある。そこで本稿

<sup>2</sup> 構造が非分析的であること、また実質的表現との区別を明確にするため、「あいさつ語」と呼ぶ。ここには、[おっす・おう・よっす・よう・うっす・ういっす・ちわっす etc.]のような変種も含む。

<sup>3</sup> 任意というのは順序性の範囲における意味である。また、選択によって複数の成分からなる混合形も形成できる。例:「おー、としえ」「あら、おそろいで」「あー、こんにちは、何だっけ? 2限?」など。

では、これらの形式を、実質的表現に属しながらも、その中でその他の実質的表現に先行配置されうるものとして、暫定的に「お久しぶり類」とし、その他の実質的表現を便宜的に「その他の表現」と呼び分け、順序性からみた発話構造を、次のように修正する。以下の考察では、この「お久しぶり類」を、あいさつ語と実質的表現との間でどう位置づけるかを併せて考えていく。

(5) (1) 間投詞→(2) 呼称→(3) あいさつ語→(4)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{実質的表現} \\ \text{a お久しぶり類} \rightarrow \text{b その他の表現} \end{array} \right\}$

ところで、上記の順序性に対して、作例の範囲ではあるが「いやーどうも、社長」や「あら、元気?〇〇さん」のように、呼称に限り順序を入れ替えることが可能である。本稿では、これを呼称の後置現象にとらえ、順序性に関わる問題とはしない。ここでは一発話を単位として扱っているが、そもそも「あら、〇〇さん、こんにちは」のような発話を一文と見なすかについては議論の余地があり、一続きの発話であっても、構造としては未分化文の集合と考える見方もありうる(宮地(1981:78))。ただ、出会いの場面における発話形式に対しては、言語以外の要素の考慮なしには理解できないと考えられる。具体的には、偶然出会った場面ならおどろいて「あら!」と間投詞を発したり、知り合いに背後から「〇〇さん」「何してるの」と声をかけたり、待ち合わせた相手に「ごめん、遅れたよ」と謝ったりするなど、出会った際の相手との距離、話し手と聞き手の相互の認識の状況、用件の有無などが、成分の選択、そして発話の形成に深く関わっている。この「出会い方」とでもいうべき相互作用の文脈的側面を切りはなしては、発話形式の構造は明らかにならないと考える。

## 2.2 あいさつ語と実質的表現の相違

あいさつ語と実質的表現の相違は、当然のことながら、発話構造の順序性におけるふるまいの違いだけではない。以下ではこのことについて、先行研究等を検討しながら、主として両者の関係づけを記述する上での問題点を明らかにしたい。

### 2.2.1 形式的特徴

小林(1981)では、出会いの場面にみられるあいさつの表現を次の2種に類別している(小林(1981:89))。

- (6)定型 一種の符帳的合図、または極端な省略表現で、意味の上からはいわゆる「非命題的」とされる表現。
- (7)準定型 「命題的」な表現で、型通りとはいえ、社会関係の円滑化に役立つような意味を一応備えたもの。

本稿であいさつ語、実質的表現として得られたデータは、それぞれ小林(1981)が「定型」、「準定型」として出した形式に相当している。この定義によると「命題性の有無」という点で、双方の範疇が対立的であるが、「命題性」をどう測定するか、ひいては互いの境界をどう定めるかについて自明でない点があり、双方の関係が完全には整理されていないように思われる。また、長谷川(2000a)では、本稿で挙げた実質的表現に相当する形式について、データから一定の形式的傾向を導き、あいさつ語との相違について考察したが、本稿では前節で定めた実質的表現に属する「お久しぶり類」の位置づけと併せて、両者の関係を再度検討する。

### 2.2.1.1 語形の短縮・要素の省略

あいさつ語は、表現が高度に定型化され、(8)のように、語形に対し形態素の切れ目に関係なく短縮を許容する傾向が強い。対照的に、実質的表現のうち、その他の表現はあいさつ語のような極端な省略はみられず、特に(9)のように命題内容や、ムード的要素の省略は許容されない。

(8) おはようございます／おはよ、 こんにちは／ちわ、ちわっす<sup>4</sup>

(9) 授業ですか？／授業？、 早いですね。／早いね  
遅れてごめんね／遅れたよ

(10) お久しぶりです／久しぶり／\*<sup>5</sup>ひさ、 お疲れさまです／お疲れ  
お待たせしました／お待たせ／お待たせしてごめんね、  
ご無沙汰してます／ご無沙汰だね／ご無沙汰！

一方(10)に挙げた「お久しぶり類」は、例えば「久しぶりに再会する」が「お久しぶり」となるように、いずれも特定の意味内容を示す表現が慣用化し、「お久しぶり」のように一語的な性質を獲得した形式である。そのため「お疲れ」「ご無沙汰」など、(9)に相当するその他の表現よりも、いっそう省略を許容する傾向にあり、ひとまとまりの形式として定型化が進んでいるといえる。ただ、あいさつ語のように、形態素の切れ目に関係ない極端な語形短縮は許容されない<sup>6</sup>。

### 2.2.1.2 要素の添加による表現の拡張

あいさつ語は、非常に固定的な性質を持ち、(11)のように他の要素を加えて表現を拡張

<sup>4</sup> もともと「こんにちは」には丁寧形がないが、一旦「ちわ」と極端に語形短縮したものに、「～っす」という丁寧さを示す文末表現が添加したものと考えられる。

<sup>5</sup> 例文に対して「\*」は非文を、「??」は許容度の低い発話であることを意味する。

<sup>6</sup> データ収集後、若年層でしばしば「おひさ」(お久しぶり)、「おっつー」(お疲れさま)など、実質的表現でありながら、形態素の切れ目に関係のない、極端な短縮語形を用いる例が観察されたが、その他の語形に比べると、はやり言葉的で、一般的に定着したものとはいえないと考える。

することができない。反面、実質的表現では、その他の表現の場合(12)のように要素の添加や入れ替えが可能であるが、(13)の「お久しぶり類」では、要素を添加すると、非文とはならないが出会いの場面での発話としては、やや不自然に感じられる。

(11)\*おはようございました/\*本当におはようございます

(12)遅くなって本当にごめんね/ごめんね遅くなって、何(して/見て)んの？

(13)??大変おひさしぶりです。/??本当にお疲れさま。

### 2.2.1.3 文の種類

あいさつ語は、それ自体で独立した発話形式を構成するが、文の種類は平叙文に限られ、(14)のように時制の分化やムード的要素はもてない。反面、実質的表現では、(15)のようにその他の表現ではそのような制約的傾向は見られないが、(16)の「お久しぶり類」では実質的表現と同じく時制の分化はもてるが、平叙文以外は許容しない。これは、前節で述べたように、形式が一種の慣用表現として定型化していることに関連すると思われる。

(14)\*おはよう？/\*おはようだね。

(15)何見てるの？ ○○じゃん！ 元気？/元気だった？

(16)お疲れさまです/お疲れさまでした \*お久しぶりですね？、\*ご無沙汰ですね？

以上から、あいさつ語が表現の拡張に対して強い制約をもつという形式の固定的性質をもち、実質的表現のうちその他の表現は要素の添加や自由な語結合によって、多くのバリエーションを作り出す創造的性質をもつという意味で対立的にとらえられ、また「お久しぶり類」は、両者の性質にそれぞれ共通する側面をもつ、中間的特徴をもつものととらえられる。

### 2.2.2 機能的特徴

前述の小林(1981)における「定型」と「準定型」の機能については、次の記述が見られる(小林(1981:89,96))。

(17)定型 主として社会関係の確認、交信導通の働きをする。

(18)準定型 相互の心理的結びつきを強め、関係を安定・維持させる役割をする。

(17)(18)の記述からは、両者がそれぞれの機能を果たすように見えるが、「定型」も「準定型」も、話し手と聞き手を、互いに安定した共通の場へ引き込むというはたらきにおいては共通するところが大きいのではないだろうか。「定型」をあいさつ語、「準定型」を実質的表現と置き換えれば、順序性とのかわりから見ると、あいさつ語で確認された社会

関係を実質的表現が強化するというように、相互に関連しあって機能を果たすととらえることができる。そして「お久しぶり類」については、小林(1981)では「準定型」に含めているが、例えば「お久しぶり」や「ご無沙汰してます」は、相手との再会に言及したもので、意味の上からはむしろ「定型」の機能に共通する「社会関係の確認」を果たしていると本稿では考える。一方で、「お待たせ」や「お疲れさま」の形式の場合は、聞き手に謝罪したり、労う意味内容をもつことから、「準定型」がもつ関係の強化という機能を持つと考えられる。

## 2.3 発話における成分の省略

### 2.3.1 省略の概要

出会いの場面の発話は、成分配置の順序性を主な制約として、任意の成分から形成される。これは、間投詞、呼称またはあいさつ語から発話を開始できるだけでなく、さらに実質的表現によっても会話を切り出せることを意味する。例えば次のような表現である。

(19) (待ち合わせていた友人に近づきながら) 「あ、ごめん、遅くなった」

(20) (偶然見かけた友人に近づきながら) 「ねえ、何読んでんのー？」

これらは、順序性から見れば(19)は[[[(1)間投詞](2)呼称 $\phi$ ](3)あいさつ語 $\phi$ ](4)実質的表現(b その他の表現)], (20)は[[[(1)間投詞](2)呼称 $\phi$ ](3)あいさつ語 $\phi$ ](4)実質的表現(b その他の表現)]という構造を持ち、いずれもあいさつ語が省略されている。この事実を表面的にとらえるならば、「あいさつを省略しても、会話を開始することが可能だ」といえることになる。従来「あいさつの交換によって会話が開始する」という説明が一般的だが、(19)(20)とは矛盾する。この場合、あいさつ語の代わりに、手を振る、会釈する等の非言語行動を行うことも考えられるが、言語行動と非言語行動の機能は等価とはいえず、またあいさつ語が省略された場合の、非言語行動の生起との相関は明白ではない。従って、あいさつ語が省略された発話において、常に非言語行動があいさつを代替すると考えるのには無理がある。出会いの場面の発話の構造を考える際に一方で問題となるのが、こうしたあいさつ語が省略された場合である。あいさつ語が省略された発話形式は頻繁に観察されるにもかかわらず、出会いの言語行動をあいさつ行動として規定することが多いために、この現象に対する説明は十分でないのが現状である。

### 2.3.2 省略に対する解釈

では、発話におけるあいさつ語の省略をどうとらえればよいか。本稿では、コミュニケーション成立のためには、少なくともあいさつ語が持つ社会関係の確認という機能を省略して会話を開始することは不可能と考え、あいさつ語が省略される場合には、基本的にはそこに現れる言語形式が機能を代替する、と解釈する。

もし、あいさつ語だけが社会関係の確認という役割を果たすとすれば、あいさつ語を省略した発話では、相互の認識や、関係の確認という機能が果たされなくともよいということになってしまう。これは、人間を含めた、動物の接触行動の原理に矛盾する。Sacks(1975)では、あいさつの交換が会話の最小単位である(Sacks(1975:68))と述べているが、例えば知人と偶然すれ違い、短くことばを交わす場面では、あいさつの交換がコミュニケーションの開始とともに終了をも指示している。このことは同時に、コミュニケーションの成立には、あいさつの交換が無くてはならないことを意味する。その上で Sacks(1975:69)では、あいさつ語(greeting)より後方に配置される”how are you?”のような表現を、あいさつ語の代用表現(greeting substitute)と呼び、これがあいさつ語と同じように用いられ、あいさつ語の代用表現の交換で会話が開始したとしても、機能上はあいさつ語と変わらず、従ってあいさつが欠けるわけではないと指摘している。本稿で述べてきた実質的表現は、発話構造上の配置制限からみると、ちょうどSacks(1975)の言う、あいさつ語の代用表現に相当する。もちろん、対象言語が英語であることを考えれば、本稿で主張する実質的表現と、あいさつ語の代用表現が同一範疇であるという確証を得るには、また別の手続きが必要であろうが、少なくとも重なり合う部分が大いであろうことは認めてよいだろう。つまり、Sacks(1975)に即していえば、場合によって実質的表現はあいさつ語を代替するということになる。これは、コミュニケーション開始時に、相互の社会関係の確認という機能が必ず果たされるためには考え方として必要であるが、機能的特徴の考察(2.2.2)からさらに進んだ解釈を必要とする。例えば「お久しぶり類」に含まれる「お久しぶり」「ご無沙汰してます」であれば、前述した「定型」すなわちあいさつ語に代替して、相互の社会関係を確認する機能を果たせるといえるだろう。しかし、前節(19)(20)にあげたような、その他の表現では、丁寧さを表す文末表現などから相対的な社会関係を部分的に確認することはできると思われるが、あいさつ語そのものに代替する機能を果たしていると見ることについては、現在のデータの限りでは難しい部分もある。この点は、今回調査対象となった大学生という属性によるデータの偏りと関係している可能性もあるので、今後データを増やしながら考察を継続したいと考える。

## 2.4 あいさつ語と実質的表現の関係づけにおける問題点

これまで検討してきた内容を、以下にまとめる。

- (21)順序性：①あいさつ語は実質的表現に先行配置される
  - ②「お久しぶり類」はあいさつ語とその他の表現の中間に配置されやすい
- (22)形式的相違：①あいさつ語は固定的な性質をもつ
  - ②実質的表現のうちその他の表現は創造的な性質をもつ
  - ③「お久しぶり類」は①②双方に共通した中間的性質をもつ
- (23)機能的相違：①あいさつ語と実質的表現とは機能的に共通している

②あいさつ語で確認した社会関係を実質的表現が強化する

③「お久しぶり類」には関係確認・関係強化の両機能がみられる

(24)あいさつ語が省略された発話では、実質的表現は部分的に機能を代替できる

以上から、あいさつ語と実質的表現の相違について、主として形式的側面で行くつかの特徴をとらえられた。あいさつ語と実質的表現は、2.2.1 以下で見た3点においては対立的なのだが、実際にはデータから傾向的な違いとして導かれたものである。よって、固定的か創造的かという性質が、双方の関係にとって本質的な対立点となるのかは、さらに詳細な考察が必要である。さらに、先行研究を含め多くの場合で、「定型」・「準定型」、「あいさつ語」・「実質的表現」、「あいさつ語」・「あいさつ語の代用表現」のように、2つのカテゴリに類別しているが、本稿で提示した「お久しぶり類」がいずれもあいさつ語と実質的表現の中間的性質を持つものと示されており、究極的には単に2つの対立でとらえていくことが本当に妥当かについても検証が加えられるべきであろう。

### 3. 発話の交換に見られる合図符帳性

これまでは一発話を単位とした考察を行ってきたが、本章以降では、発話交換を分析の単位として検討する。

出会いの場面においては、通常あいさつの交換によって、コミュニケーションの開始が指示されるが、その手続きをより容易にしているのが、発話交換においてしばしばみられる、合図符帳性という性質である。出会いの場面における最も代表的な発話の交換は、あいさつ語に対して、同じあいさつ語で返答をする、いわば「おうむ返し」をするというものである。この合図符帳性を、発話の交換においてもちいるか、つまり「おうむ返し」を許容するかどうかという点において、あいさつ語と実質的表現は興味深い相違をもっている。にもかかわらず、この領域に対する記述はほとんど見あたらないのが現状である。ここでは、限られたデータの範囲ではあるが、この点について考察していきたい。

#### 3.1 現象の概観

本稿では、発話の交換に見られる合図符帳性を、「同じ発話形式で隣接ペアが形成されること」ととらえる。小林(1981)や鈴木(1981)では、あいさつ言葉の基本的な特徴にこの発話の合図符帳性を挙げていて、あいさつ言葉のようにきわめて高い定型性を獲得した表現の場合には、このような発話の交換にみられる合図符帳性によって、コミュニケーションが開始されたことを指示する機能を果たすと指摘している。

その最も端的な例は、(25)や(26)などのあいさつ語による発話の交換であろう。(25)では、話し手と聞き手の関係が非対称であることが、丁寧さを表す文末表現の添加によって指標されているが、発話がおうむ返しされていることに変わりはない。くりかえし同じ形式が用いられ、それ自体がきわめて高度に定型化されるとともに、このような合図符帳性を形



式が獲得し、おうむ返しが許容されると考えられる。

(25)「おはようございます」－「おはよう」

(26)「こんにちは」－「あら、こんにちは」

一方、実質的表現においては、(27)(28)のように、おうむ返しは一般にみられず、あいさつ語とは対照的に、表現が合図符帳性をもたないことが示される。一見おうむ返しに見える(29)は、聞き手が話し手に答える形で「元気。」と言わない限り許容されないので、合図符帳性を持つとは言えない。

ところが実際には、(30)(31)のように実質的表現の中にも、おうむ返しを許容するものがある。すなわち、実質的表現の中には、合図符帳性をもつものと、もたないものが存在していることになる。このように実質的表現の中にはっきりとした対立が存在することは、これまで検討してきた一発話レベルの考察では、見られなかったことである。そこで、次節以降では実質的表現における合図符帳性に着目していくことにする。

(27)(待たせた友人に対して)「ごめん、遅れたよ」－「いいよ、いいよ」

(28)(テスト勉強中の友人に対して)「ねえ、何読んでんの？」－「んー、もうダメー」

(29)(偶然出会った友人に対して)\*「元気？」－「元気？」

(30)(偶然出会った友人に対して)「暑いねー」－「暑いねー」

(31)(待ち合わせた友人に対して)「お久しぶりです」－「おー、久しぶり」

## 3.2 実質的表現における合図符帳性

### 3.2.1 発話の表現類型からみた分布

実質的表現には、さまざまな種類の表現が含まれる。これを概観するには、なるべく数多い場面での言語行動を見渡す必要があるが、出会いの場面に見られる実際の発話形式を類型化したものに、小林(1981)、米川(1985)、長谷川(2000a)がある。以下に、それらを参考にしながら、実質的表現に相当する発話の表現類型を示す(カッコ内は発話例)。

(32)謝罪の表現 (遅れてすみません、お待たせ、待った?、わるいね、ごめんね、…)

(33)相手の行動に対する質問 (何してるの? どうしたの? どこいくの?、…)

(34)相手の状態に対する質問 (元気?、お元気ですか、最近どう?、…)

(35)労いの表現 (来るの早いね、お疲れさま、ご苦労様、がんばってるね、大変だね、…)

(36)相手の存在の発見や確認の表現 (いた!、きたきた!、〇〇だ!、…)

(37)待ち合わせに遅れた相手への非難の表現 (遅い!、遅いよ!、待ったよ!、…)

(38)再会に関する表現 (お久しぶりです、奇遇ですね、よく会うね、また会ったね、…)

(39)天候に関する表現 (暑いね、暑いですね、…)

#### (40) 次の行動の示唆や促しの表現 (行こう、行こうか、帰ろう、帰ろうか、…)

この中で、発話形式自体が質問の形をとる(33)や(34)のような、相手の行動や状態をたずねる表現は、合図符帳性を持ち得ないことが自明である。それ以外でおうむ返しを明らかに許容し、発話形式が合図符帳性をもっているといえるのは、再会に関する表現類型に属する(38)の表現と、「暑いですね」や「寒いですね」などの天候に関する(39)の表現だけである。ただ、これらの合図符帳性をもつ発話形式は、2章までのように一発話レベルで見限る限り、発話文が平叙文に限られる他は、合図符帳性をもつことにつながるような、目立った共通点はないように思われる。次節では、表現における合図符帳性の有無を明確に見分ける手がかりについて検討を加える。

#### 3.2.2 合図符帳性の有無を判断する手がかり

では、おうむ返し可能な実質的表現は、何を根拠に合図符帳性をもつといえるのだろうか。質問の形をとる発話表現の場合には合図符帳性を持ち得ないと述べたが、それは言いかえれば、発話表現が指示する内容が、話し手と聞き手とにとって対称的な事態でないからである。例えば「元気ですか?」という発話があった場合、通常それは聞き手に対して「(あなたは)元気ですか?」ということの意味するし、「待った?」であればそれも同じく「(あなたは)待った?」ということをたずねているのである。このように発話内容が、何を目当てに述べられているかを理解することは、コミュニケーションの適切な成立にとって不可欠な要素である<sup>7</sup>。

反対に、合図符帳性をもつ「お久しぶりです」のような再会を喜ぶ発話表現の例を見てみよう。「奇遇ですね」「また会ったね」「よく会うね」の表現は、聞き手だけでなく話し手とともに「(われわれは)また会ったね、よく会うね」ということを意味しており、それが指示する内容が、話し手と聞き手にとって対称的な事態であるといえるのではないだろうか。「お久しぶりです」については、やや定型性の程度が進んだ表現なので、構文的構造から指示内容を抽出することが難しいが、「(われわれは会うのが)久しぶりである」ことと解釈するならば、これが話し手と聞き手の両者にとって対称的な事態を表しているといえることができる。

このことから、実質的表現における合図符帳性の性質は、その表現がどのような事態に対する言及であるかということに、何らかのかかわりを持つのではないかと考えられる。

出会いの場面では、実質的表現が何について述べているかについて、以下の3種を挙げることができると思われる。次節では、これらを手がかりに、実質的表現に相当する発話表現のデータを分類した上で、合図符帳性という性質と何らかの関係を持っているかどうか

<sup>7</sup> 例えば、「元気?」と聞かれて、「元気よ」と答えた聞き手に対し、「ちがうよ、彼氏がだよ」と話し手がからかうことがある。これは、「元気?」が指示するものを、聞き手が聞き手自身のことと自動的にとらえたために起こるディスコミュニケーションの例である。

かについて検討する。

(41)話し手・聞き手の両者にとって対称的な事態を述べる

(42)話し手自身について述べる

(43)聞き手について述べる

### 3.2.3 分布結果

次の表は、(32)から(40)の類型にあてはまる発話表現のデータを、前節で検討した(41)～(43)に従って分類した結果である。縦軸は(32)から(40)の表現類型項目に相当し、横軸は(41)から(43)にあげた、発話表現が述べている事態と、話し手及び聞き手との関係を示す。横軸左から順に「話し手・聞き手の両者にとって対称的な事態を述べるもの」「話し手自身について述べるもの」、「聞き手について述べるもの」の項目である。それぞれから見た場合にあってはまる発話表現があった場合、その発話表現が属する類型に○を付ける形で分布を示している。そして、各表現類型が合図符帳性を持つかどうかの分布を横軸の右端に示した。

	両者	話し手	聞き手	合図符帳性
謝罪の表現		○	○	×
行動に対する質問			○	
状況に対する質問			○	
労いの表現			○	
存在の確認の表現			○	
非難の表現		○	○	
促しの表現	○			△
再会に関する表現	○			○
天候に関する表現	○			

(44)発話表現が述べる事態と表現類型との関係

まず、「話し手・聞き手の両者にとって対称的な事態を述べるもの」に相当する表現は、「再会に関する表現」、「天候に関する表現」および「促しの表現」が含まれた。「促しの表現」の一部をのぞき、これらの発話形式は、おうむ返しを許容すると判断され、合図符帳性を持っていることがわかる。「促しの表現」では、「行くぞ」「行くよ」の形式の場合にはおうむ返しを許容できない。それは「行こう」や「行こうか」など聞き手への働きかけが強い形式とは異なり、話し手の意志表現で聞き手への働きかけが形式上に明確化されないために、話し手・聞き手相互に対称的な事態としての読みがしづらいためと思われる。

(45)再会に関する表現：よく会うね。また会ったね。奇遇だね。久しぶり。

(46)天候に関する表現：あつついねー。

- (47)促しの表現：「さあ、行こう」－「うん、行こう」「行こうか」－「行きましょうか」  
\*「行くぞ」－「行くぞ」、\*「行くよ」－「行くよ」

一方、「話し手自身について述べるもの」、「聞き手について述べるもの」である場合には、(45)～(47)以外のすべての表現類型についてあてはまり、かつすべての場合で、これが発話された時におうむ返しを許容しない、すなわち合図符帳性をもたないと判断された。「聞き手について述べるもの」には多くの発話形式が分類され、あてはまる表現類型もさまざまであるのに対し、「話し手自身について述べるもの」は少なく、いずれも待ち合わせていた場面での謝罪・非難の発話表現であった。以下にいくつかの例を示す。

- (48)謝罪に関する表現(話し手自身)：遅くなりました。お待たせしました。  
(聞き手)：お待ちとおさま。待った？  
(49)行動に対する質問：お出かけですか？何してんの？どこ行くの？  
(50)労いの表現：早いね。お疲れ。お疲れさま。  
(51)存在の確認の表現：きたきた。きてたのか。おっ〇〇じゃん。  
(52)非難の表現：待ったよ(話し手自身)。遅い／遅いよ(聞き手)。

### 3.3 分析のまとめ

本章における分析の結果、発話の交換におけるあいさつ語と実質的表現には、合図符帳性の有無という点で明確な違いが見られた。考察結果を以下にまとめる。

- (53)あいさつ語は、すべての場合において発話のおうむ返しを許容する。よって、あいさつ語は、合図符帳性を特徴的にもつものにとらえられる。  
(54)実質的表現は、発話のおうむ返しを許容するものと許容しないものがある。  
これは、発話表現が述べている事態と、話し手・聞き手の関係から分けられる。  
a.発話表現が述べている事態が、話し手・聞き手の両者にとって対称的である表現については、一部を除き、発話のおうむ返しを許容する。  
b.発話表現が述べている事態が、話し手、または聞き手のどちらかに関する言及である表現については、すべての場合で発話のおうむ返しを許容しない。

以上から、ある発話形式が出会いの場面の発話において合図符帳性をもつかどうかについては、その表現が何について述べられたものであるか、いわば表現において何を目当てとしたものかをさぐることによって、理解できるのではないかと本稿では考える。聞き手は、話し手がどのような発話形式で話したとしても、それがおうむ返しできる形式であるかどうかを瞬時に判断できる。話し手の発話があいさつ語であれば、反射的におうむ返しを行うだろうし、実質的表現であった場合にも、聞き手は話し手の発話が何について述べ

ているかを、ほぼ間違ふことなく正しく理解して応答していると考えられるのである。

ただ、実質的表現の場合、聞き手は話し手の発話形式から必ずしも自動的に合図符帳性を判断できるとは考えられない。例えば「お疲れさま」という発話形式が、図書館で勉強している聞き手に対する話し手のねぎらいとして用いられれば、事態は話し手と聞き手にとって対称的とはならないので、聞き手は「ありがとう」という可能性がある。しかし、仕事場で互いを労うという文脈があつて「お疲れさま」といわれたのであれば、それは話し手と聞き手の両者にとって対称的な事態となるので、「お疲れさま」とおうむ返しをすることもできるだろう。つまり、合図符帳性の有無は、言語形式自身が決定的に持つとは限らず、文脈によって聞き手の判断を必要とすると考えられるのである。

#### 4. まとめと課題

以上の分析では、あいさつ語と実質的表現という2つのカテゴリを主として、その相違を一発話を単位に形式・機能の点から、さらに発話連鎖の観点からおうむ返しをとりあげ、それぞれ見てきた。考察の結果、それぞれのレベルで両者の違いを特徴的にとらえることができたと思う。特にあいさつ語は、順序性における配置順位、形式・機能的用法において、実質的表現に比べて相対的に限定されていて、発話の交換における合図符帳性を考察した結果、やはりあいさつ語の方がより定型であるという結果を得た。しかし一方で、両者の間には、基本的には実質的表現に属する「お久しぶり類」があり、さまざまなレベルであいさつ語・実質的表現のどちらにも共通する側面をもっている中間的な存在として見いだされた。このことは、いくつかの表現において、定型性の獲得が進んでいる過程のあらわれとしてとらえられるのではないだろうか。そのことはまた同時に、定型性の獲得が、言語行動のさまざまなレベルにおいて実現されるものであることをも示している。言語行動の歴史的変遷を扱わないかぎり、どのような推移で定型化が進むかを知ることはできないが、本稿で主として用いた用法的制限からの記述によって、共時的な視点で言語行動における定型性の一側面を見ることができるとは思ふ。

今回は、話し手の発話を受けての、実質的表現に含まれる聞き手専有の発話表現(「いいよ、いいよ」や「こちらこそ」など)については触れることができなかった。今後はコミュニケーションレベルでの考察を継続する中で、話し手の発話表現に対する聞き手の理解と、その結果としての聞き手の応答形成といった相互作用の側面についても取り組んでいきたいと考えている。

#### 【参考文献】

小林祐子(1981)「日本人とアメリカ人の挨拶行動—出会いの挨拶—」東京女子大学付属比較文化研究所紀要第42号

甲斐睦朗(1981)「現代日本語のあいさつ言葉について」愛知教育大学国語国文学報第42号

----(1985)「現代日本語のあいさつ言葉における順序性」日本語学、4-8、明治書院

- 杉戸清樹(1981)「あいさつの言葉と身ぶり」『あいさつと言葉』文化庁ことばシリーズ 14
- 鈴木孝夫(1981)「あいさつとは何か」『あいさつと言葉』文化庁ことばシリーズ 14
- 土屋頼子(1998)「言語行動を構成する要素とその機能—出会いのあいさつを中心に—」『筑波  
応用言語学研究』5, 筑波大学大学院文芸・言語研究科応用言語学コース
- 長谷川頼子(2000a)「出会いの場面にみられるあいさつ言葉以外の表現」『言語学論叢』第 19  
号、筑波大学一般・応用言語学研究室
- (2000b)「出会いの言語行動における多様性と形式的分類」『筑波応用言語学研究』7, 筑  
波大学大学院文芸・言語研究科応用言語学コース
- 宮地裕(1984)「倒置考」日本語学、3-7 明治書院
- 米川明彦(1990)「大学生のことば—あいさつ語を中心に」日本語学 9-4、明治書院
- Lüger, Heinz-Helmut (1983) Some Aspects of ritual communication. *Journal of Pragmatics*.7:695-711.
- Sacks, Harvey (1975) Everyone has to lie. in Sanches & Blount(eds.), *Sociocultural Dimensions of  
language use*. New York:Academic.